

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2371301181		
法人名	(株)パートナーシップ		
事業所名	グループホーム優楽家		
所在地	愛知県名古屋守山区百合丘1812		
自己評価作成日	平成26年11月19日	評価結果市町村受理日	平成27年3月5日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入所された利用者には健康な時には、少しでも長く元気で楽しい日々を過ごして頂く為に、食事は職員の手作りの料理を出来る限り個々の好き嫌いに合わせ食材、献立を工夫して提供しています。また、利用者が老いたり、病気が重度化し看取り介護が必要になった時には本人、家族の希望を最優先に、主治医、ホームと3者が常に連携し、仮に途中で迷う事があっても、その時々で最善の方向に向かうよう支援させていただきます。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_2014_022_kani=true&JigvosyoCd=2371301181-00&PrefCd=23&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人『サークル・福寿草』		
所在地	愛知県名古屋熱田区三本松町13番19号		
訪問調査日	平成27年12月12日		ユニット1

ホーム内はゆったりとした空間を確保していることで、利用者同士の距離が適度に離れ、圧迫感のない生活環境が整えられている。ホームで利用者は、日常生活の中で、リビングでのんびりと過ごし、調理や片付け等のできることに参加したり、一人ひとりが思い思いに過ごしている。ホームでは、運営推進会議の機会を活かして、ホームの運営につなげるように、近隣のホームの協力も得ながら会議で様々な話し合いが行われ、出席者からの前向きな意見を引き出すように取り組まれている。今年度の運営推進会議での新たな取り組みとして、地域の方にも協力をお願いして、ホームから地域の避難場所まで一緒に歩取り組みが行われている。地域の方と高齢者が地域での生活を継続していくことの課題等を実践を通じて話し合い、相互に理解を深めていく取り組みが行われている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット1

〔セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所は地域に支えられながら、また共に生活している事を前提に理念を謳い、真理についても社内勉強会でテーマに掲げ、事業所全体で考え合い、理念に基づいて業務を遂行している。	「優楽家」という事業所名も踏まえながら、ホーム独自の理念がつけられており、ユニット毎に掲示を行っている。職員には、理念をテーマにした勉強会を行い、日常的に意識するよう取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所近隣の住民の方には利用者との散歩や、飼い犬の散歩時の挨拶、自治会の主催する夏祭り、地元社協開催の福祉まつり等への参加で交流を深める働きかけをしている。	地域との交流は、徐々に深まっており、地域のサロンへの参加や保育園の園児との交流の機会がつけられている。また、ホームでボランティアの受け入れも行っており、相互の交流に取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域推進協議会が主催する、大森北学区の認知症講座の講師として参加し、認知症やグループホームについて実演を混じえた講義を行い、また個別に相談に応じ、地域住民に向けて理解を深めて頂けるように努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所報告、外部評価の結果報告や、また関係者の方々の関心のあるテーマを取り上げ、話し合いや講習を行っている。年に1回、定例で近隣GHと合同運営推進会議を継続し、サービス向上や運営に関わる問題を提示し、意見交換を行っている。	会議がホームの運営につながるように、ホームと同じ地域にあるグループホームの方との会議の開催が行われている。また、地域の方に協力してもらい、地域の避難経路を歩く取り組みも行われている。	ホームでは、運営推進会議を活かしながら、新たな取り組みも行われている。今後も関係者と意見を交わしながら、より良いホームづくりにつながることを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃から、保健所、社協と情報交換し、利用者に必要な保険外サービスや災害時の対応などについて相談をしている。今年度より始まった守山区いきいき支援センター主催の守山区グループホーム連絡会に出席している。	市で開催される研修会等に職員が参加するよう取り組んでおり、情報交換等につなげている。また、区の地域包括支援センターが開催したグループホームの方との集まりに、ホームも参加しており、情報交換につなげている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全体会議やカンファレンスを通して、事例を基に、身体拘束に当たる行為を再認識し、「身体拘束ゼロ」に向けて取り組んでいる。	身体拘束を行わない方針を掲げ、利用者の状況から玄関に施錠を行っているが、随時、外に出るよう取り組んでいる。また、日常的な職員による対応についても、管理者より注意喚起等が行われている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	社内で勉強会を行い、日々、不適切な言動がないか再確認し、無意識の言動も虐待につながる可能性があることを理解するよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	不動産の売却や財産管理について家族から相談を受ける機会が増え、関係機関と情報交換したり、制度について学び、家族の要望に応じて情報提供している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関しては、事前に重要事項説明書に沿って、利用者又は家族の方に施設利用する上での説明を行い、理解、納得の下、署名と捺印したものを双方一ずつ保管し改定の際にはまず書面を送付、案内し了解を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族向けには、家族会を開催し相互の意見交換を行い、利用者には普段から要望、不満等の意見集約用紙によるアンケートや直接面談で聞き取り、その内容を会議等で報告し運営に反映している。	家族会の他にも行事を通じた交流が行われ、意見交換等に取り組んでいる。意見箱の設置や独自のアンケート活動も行われている。また、ホーム共通の便りの発行と個別の現状報告を毎月行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1の全体会議、各フロアのカンファレンスで職員の意見を聞くとともに、必要ならば時間外にも席を設け拝聴、相談に対応し職員が安心して業務に付けるよう努め、評価シートも活用している。	ユニット毎の会議とホーム全体の会議を毎月行っており、現場からの意見等は管理者を通じて法人にもあげられている。また、管理者による、職員毎の自己評価を通じた個別面談の機会も年1回つくられている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	組織的に現場管理者は直属の上司に職員の勤務状況や要望を報告し、代表者はそれを受け職場改善の為に設備投資や昇給、行事の慰労会、忘年会等の福利厚生に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社内研修として「勉強会」を開催し、また個々の職員の経験年数、習熟度に応じて、名古屋市社協主催の「キャリアアップ研修」に参加を促している。新入社員には個々に新人研修を実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣のGHと定期的に交流の機会を持ち、年に1回は合同運営推進会議を行っている。お互いの行事にも見学、参加することで新たな目線で発見した事を事業所に取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居の相談の際は、訪問したり、来所して頂き、見学や面談を重ね、不安の解消や本人の要望を聞くようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居の相談の際は、訪問したり、来所して頂き、見学や面談を重ね、不安の解消や家族の要望を聞くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居の相談時には面談を重ね、現時点で本人と家族の望む必要なサービスは何か見極め、事業所のサービス内容を提示し、相互理解に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員も利用者と同じ時間、空間を共有する者として、利用者のその時々々の想いを共感し、共に考え、励まし合う関係作りに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	随時、本人に対する家族の意向を伺い、それを踏まえた支援ができるよう努めている。家族が抱えている問題や背景等も配慮し、それぞれの家族関係の維持を支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	個々に今まで培った地域との関係や人間関係の把握に努め、入居後も関係を継続できるよう援助している。気軽に交流できる環境作りに努めている。	利用者の友人や習い事の関係の方等、馴染みの方がホームに訪問して交流が継続されている方がいる。また、家族と食事や買い物他にも、親族の葬儀の際には、利用者も同席できるように、ホームからの支援も行われている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員は常に利用者の状況、人間関係を把握し、トラブルの際もさり気なく介入し、問題解決に努めている。利用者同士が快適に交流し良好な関係が維持できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	事業所では、サービス終了後も、現況を伺ったり、来訪者があったことを連絡したり、また要請があれば相談等を受け付け、その後も交流ができるよう窓口は常にオープンにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意志を尊重した生活スタイルを維持できるように努めている。適切に言葉で表現できない方については、日常生活を通して、日々の言動から本人の望みを把握している。	職員は担当制で利用者の把握に取り組んでおり、介護計画の見直し時やカンファレンスの際に報告が行われ、職員間の共有につなげている。また、日常の記録用紙を大きくつくり、利用者に関する職員の気付きを記録に残すように取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に今までの生活歴についてアセスメントし、職員間で情報を共有できるようにしている。また随時、家族や親戚、知人等から得た情報は記録に残し、カンファレンスで発表している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	今までの生活スタイル、生活習慣を重視し、本人の持っている能力や機能を充分生かして生活できるよう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の日頃の言動から、どんな生活を望んでいるか把握し、随時、本人や家族と話し合っている。状況によっては医療関係者の意見も伺い、総合的にカンファレンスで話し合いを重ね、介護計画を作成している。	介護計画は写真も掲載した内容で作成し、基本6か月毎に見直しており、変化に合わせた見直しも行われている。モニタリングについては担当者も参加しており、家族との面談も行いながら6か月での評価につなげている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々のケアの実践は個人の介護計画に反映している。一日の全体の様子、特記事項、伝達事項は申し送りノートで情報が共有できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々の求める要望や状況に応じて、介護保険外サービスの利用を検討したり、医療関係者と連携して、医療保険の訪問マッサージを取り入れたりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の保育園との園児交流や近隣の喫茶店、美容院を活用し利用者の方々の暮らしの中で地域資源との協働することで満足や豊かさを感じてもらっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力医療機関に月2回の定期往診で健康管理を行っている。ホーム内ではパーテーションを設置し利用者のプライバシーを守ることで、より適切な診断ができるよう支援している。	協力医による月に2回の訪問診療の他、必要に合わせた連絡も可能である。受診は、基本家族による対応であるが、ホームからの情報提供も行われている。また、週1回の訪問看護も行われ、利用者の健康チェックが行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の状態を定期的に協力クリニックの訪問看護師に報告し、健康管理を行って頂き、協力医と連携を図りながら、助言、指導を仰いでいる。時には勉強会の講師として直接、職員向けに指導して頂いている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には定期的に病院へ出向き、情報提供や情報収集を行っている。退院に向けて主治医、家族、ホームの三者で話し合い、利用者、家族の希望、要望に沿った対応ができるように他の関係機関と連携したり、援助している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期のあり方については、利用者の入所時に家族へ説明し、その時期には改めて話し合いの場を設け、気持ちの変化にも随時対応し、主治医にも立ち会って3者で合意のうえ方向性を見つけ共有し支援している。	看取りについては前向きな取り組みが行われ、協力医とも必要な連携を深め、看取り支援の実績もある。家族とは利用者の段階に応じた話し合いが行われ、意向に合わせた支援ができるよう取り組んでいる。	職員間で利用者の看取りを見据えた支援に関する知識と技術の向上に継続的に取り組みながら、利用者が最期まで過ごすことができるようなホームづくりにも期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応について、夜間対応マニュアル作成し、会議で適切な対応ができるよう、周知徹底している。AEDを設置し対応できるよう準備し、玄関先にも看板を出し近隣に案内している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の防災訓練では、夜間時の火災発生を想定した避難訓練を実施。また、地震等で事業所を離れ避難が必要と想定し近隣のGHと最適な避難場所までの行程を歩行で検証。	年2回の避難訓練の際には、夜間を想定した訓練や事前予告なしでの訓練も実施し、実践的な訓練にも取り組んでいる。また、地域の方の協力を得ながら、地域の避難場所の確認も行っている。水や食料等の備蓄にも取り組んでいる。	ホームは、地域の方の前向きな協力も得られている関係でもある。住宅地という環境も踏まえながら、相互の関係が深まることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	自尊心、羞恥心とは何か、職員自身に置き換えて考えてもらい、人として当たり前の権利が守られるよう配慮している。	職員には、「自分自身だったらどうか」という視点も持ちながら、利用者が人生の先輩であることを踏まえた接し方に留意するように伝えている。また、接遇に関する外部研修の際には、職員が受講するように取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員の主観でなく、利用者が自ら選択し、決定できるよう支援している。利用者の希望に沿って自己決定に至るまでの援助を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人の生活リズムや習慣、ペースがあることを把握し、できる限り個別性のある支援を行うと共に、日常的に決まりや都合を優先した支援にならないよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服の買い物やお気に入りの美容院の付き添い支援をしている。日常の洋服もご本人が好きな服を選ぶことができるよう、声掛け支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	簡単な調理準備や盛り付け、配下膳について、できる限り利用者と共に進めるようにしている。また、職員が利用者と同じテーブルで食事をとる事で、コミュニケーションを図っている。パイキング形式で好きな物を選んで食べて頂く機会を設けている。	メニューは料理当番がその日に考え、利用者の好みや嗜好にも配慮して作成している。おやつ作りや行事に合わせた食事やミキサーやトロミ等の形態の食事の提供も行われている。また、食事の際には職員も同席をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者共用のミニ冷蔵庫を設置し、個人の宅配飲料などを保管し、自由に使用して頂いている。介護記録に1日の総水分量を記載し、個々の状況を把握することで、水分量が少なくならないよう提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後には必ず声掛けで口腔ケアを促し、介助が必要な方は職員で支援している。夜間は、極力義歯を外して頂き、就寝中に義歯洗浄を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	オムツ類使用者も毎食後必ずトイレに座って頂き、トイレでの排泄を促している。廊下にモニター設置し、自立されている方の排泄パターンの確認に努めている。	職員は、介護記録に排泄チェックを行い、利用者の排泄状態の把握を行いながら、トイレでの排泄につなげている。紙パンツだった方が布パンツに移行する等、利用者の排泄状態が改善した事例もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便に関しては、別紙の排便チェック表で個々の排便リズムを把握している。毎朝食にヨーグルトを提供し、便秘の方にはこまめに水分補給を促している。便意がない方も腹部マッサージを行ったり、しばらく便座に座って頂く事で排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	可能な限り、利用者の希望に応じて、一人一人の入浴時間、タイミングを考慮している。拒否のある方は、直接的な声掛けでなく、世間話をしながら気分を高めてもらったり、さり気なく浴室に案内している。	ホームでは基本1日おきの入浴の方が多いが、希望に合わせて毎日入浴している方もいる。入浴を拒む方には声かけを工夫している。また、職員複数体制での入浴や、季節に合わせた入浴も行われている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者個々の生活リズムに合わせ、好きな時間に休息して頂いたり、就寝時間もその人に合わせて対応している。夜間眠りの浅い方については、生活歴や昼間の活動を見直している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情書は常に職員が確認できる場所に保管している。かかりつけの薬局と情報交換している。症状の変化は、訪問看護の際に相談し、家族に報告、主治医と話し合いながら、治療方針を決めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人、家族から得られた情報を下に、掃除、洗濯、炊事のそれぞれの場面で、個々の得意な事や好きな事に携わって頂いている。また、水分補給時は、個々の嗜好に合わせた飲み物を提供している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日々の中で、買い物、喫茶、ドライブ等、可能な限り希望に沿った外出支援をしている。毎月の行事では季節にちなんだ企画をし、遠出や外食を行っている。離れた親戚、知人に会いたい時は家族の協力をお願いしている。	ホームでは、気候等にも合わせながら外出の機会をつくっており、利用者に合わせて個別の外出も行われている。また、定期的な外食の機会や、季節に合わせた花見や公園等への外出行事も行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者の個人の希望によっては、家族了承の下、小額の現金を所持してもらい、安心感を得てもらっている。また、買い物に出掛けた際にはできる方には、ご自分で支払いして頂くよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族、親戚、知人等に連絡を取りたいという希望に応じて、電話や手紙はいつでもできるよう支援している。また、携帯電話を持ってみえる方も電話をしたい時にかけている。年賀状も本人の手書きであいさつ文を書いて頂くよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が自分の家にいるような家庭的な雰囲気を出し、本人にとって馴染みの場所であると思って頂けるような配慮をしている。また、季節の飾り付けを利用者と共に行うことで季節感を感じて頂けるよう努めている。	ホーム内は広い空間が確保され、色彩も落ち着いていることもあり、利用者が日中をゆったりとした気分で過ごすことができる。また、リビングには季節に合わせた飾り付けも行われ、季節感にも配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間の居心地の良さそうな所にソファや椅子を置き、一人でも数人でも気ままに自由に過ごせ、また家族、来客と談笑もできる場所として工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には家族と相談しながら、本人の愛用の家具、雑貨等、使い慣れた物や好みの物を取り入れ、本人の居心地の良い空間作りに努めている。	居室内には利用者の好みで様々な家具類を持ち込んでいる方や趣味の編み物等をしている方もいる。また、家族の写真を飾ったり、仏壇を持ち込んでいる方もあり、一人ひとりが過ごしやすい居室づくりが行われている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	屋内ではできる限り自由に行動できる環境として、EVや階段も利用者本人が利用できるように開放しながら、常にモニターや目視で行動を見守り、目の届かない居室には赤外線センサーで行動を把握し安全を確保している。		